

「中国野菜を自分でつくって食べたい」

SNS 活用による知り合いへの直接販売

楊 世栄さん

就農コース 15・16 期生 (R2 年 9 月修了)

インタビュー 令和 4 年 9 月

1、なぜ農業をしようと思ったか

日本では手に入りにくい中国野菜を自分が食べたかったので、市民農園で栽培を始めたが収穫時期には食べ切れず、知り合いに配るなどしていた中で、自分と同じように中国野菜を欲しいと思っている人がいることに気付いた。子育てもひと段落し自分の将来を考えていたこともあり、農業に興味を持つようになる。

先に夫が楽農生活センターの就農コースに申し込んだが、仕事と就農コースの両立は難しく辞退したことから、まだ募集期間中でもあったので、自分が第 15 期就農コースに応募し、研修生になる。



2、楽農センターで学んで

就農コースは 15・16 期と 2 年間研修を受けることができた。

センターでは、土づくりや栽培技術等の農業の基本技術を学べたことと、就農コースの同期の友達ができた。

就農は、中国野菜による経営を考えていたので、指導員に中国野菜に関する質問を多くしたが、知識の薄いところは調べて必ず答えてくれ、大変感謝している。

3、新たに就農して

神戸市西区に、ハウス 3 棟と露地併せて 50a ほどの農地で就農している。

食べるヘチマ、小米辣椒 (中国の唐辛子)、チャンチン (ナツツバキの新芽)、アマランサス (ヒユナ) 等、珍しい中国野菜を中心に常時 5~6 種類栽培している。

特にヘチマは大人気で、来年度はハウスを 2 棟に増やす予定。

珍しい中国野菜は、登録農薬が少ないこともあり、農薬をできるだけ使わずに栽培している。

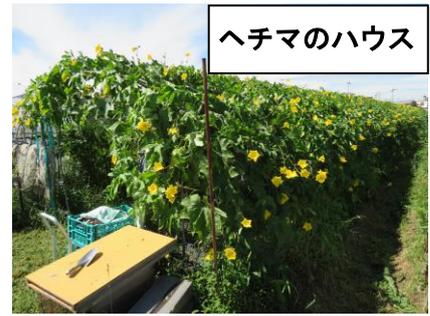
出荷はネット販売が中心で、注文が入ってから、収穫して箱詰めで発送しており、口コミで購入者が広がっている。また、「WeChat」という中国の LINE のようなチャットアプリで、栽培や収穫の様子を発信しており、その発信を見た人から質問や感想が届き、購入層の拡大に繋がっている。



直接販売のため、購入者との距離が近いのも励みになっている。

現在は、朝日が出るころから昼過ぎまで収穫作業を行い、続いて日が沈むまで、定植や除草などの栽培管理を基本1人で行っている。散水ホースを引いて水やりの時間を減らす、直売所への販売では出荷向けの袋詰作業や引き取りの時間がかかるが、直接販売なら他の作業時間にあてられるなど、できるだけ効率良く作業が進むように努力している。

また、個別配送なら使用済の空箱に簡易包装で詰め合わせて出荷できるし、大口利用で配送費も安くできる。



4、今後について

今年は、注文があっても、収穫がすでに終了しておりお断りしたこともあったので、来年度は露地栽培を減らしてハウスの数を増やし、収穫時期をずらす抑制栽培を行うことで、より多くの人に中国野菜を届けられるようにしていきたい。

夫が第17期就農コースを受講して、現在近くの農地で主にJAの共同出荷作物の栽培をしている、子供も土日には手伝ってくれるようになるなど、家族の協力を助けられている。